

新連載 患者目線の医療安全 1

医療者が気付いていない

「患者との情報共有が医療安全につながる」理由

患者の視点で医療安全を考える連絡協議会 世話人 勝村 久司



病院と学校の共通点

私は、病院の職員研修や、大学の医学部や看護学部の授業などで、時々、患者の視点でのお話をさせていただく機会があります。その際の参加者の感想には、医療を受ける患者の視点で話したことだけでなく、私の職業である高校教員の視点で話した内容に関するものが多いのが常です。

そもそも、医療と教育は、どちらも「人間を相手にする仕事」であるという共通点があります。実際、私は我が子の医療事故をきっかけに医療のさまざまな問題について関心を深めていくほどに、ひるがえって、教育にも多くの問題があることに気付くという経験を何度もしました。医療と教育は、お互いに学び合える要素をいくつも持っています。ケアレスミスの防止対策もその一つです。

高校の定期テストは必ず返却する

医療安全を高めるためには、ケアレスミスの防止は大きな課題の一つです。ところが、医療界は、これを医療者だけでやろうとし過ぎているように思います。

高校では、期末テスト等の定期考査で、成績を誤って確定してしまうようなケアレスミスを防ぐために、答案を生徒に返却しています。返却する際には、採点に使用した模範解答も印刷して全員に配り、教員は「丸の付け間違いや丸の数え間違いがあれば、前に持ってきてください」と言います。

つまり、「先生は採点を間違ふことがある」ということが前提となっているのです。そして、間違いではないか、という疑義が出されると、改めて両者で確認をしたうえで、間違いであることがわかれば修正するのです。

1人の教員の目で見ると、クラス全員の40人の目で見ると確認作業の質が高まるのは当然です。しかも、教員にとっては、個々の答案はあ

くまでも「40人の中の1人分のテスト」に過ぎませんが、生徒にとっては「自分のテスト」であるということも大事なポイントです。自分が取り組んだものだし、自分の評価に関わる大切なものですから、高い集中力でチェックすることができます。

最高の安全対策は患者との情報共有

同じように、ケアレスミスの防止のために、医療界ももっと患者と情報共有すべきではないでしょうか。たとえば、「この患者はこの薬剤の点滴中にこういう症状が出たら中止する」「この患者は何時になれば、この検査をして、その値によってはこういう処置を行う」「この患者とこの患者は名字が同じなので、間違わないように注意する」というような情報を、少ない看護師だけで共有したり、引き継いでいったりするのではなく、患者や家族とも共有するシステムを作ればいいのではないのでしょうか。

もちろん、テストを返却しても、「今回は、まったく勉強できなかったから」とか「このテストは自分にとっては重要ではない」などの理由で、きちんとチェックしない生徒がまれにるように、患者や家族も、病気の内容やそのときの病状等によって対応は様々に変化するでしょう。

しかし、「医療チームでは、術後に、特にこのことを注視することとしています」「今日の当直の看護師の間で、特にこの点に注意しようと話しています」などの情報を患者や家族と共有しておけば、ケアレスミスを防ぐ「目」の数が増えますし、患者自身の治療への理解も深まり、患者を中心としたチーム医療の実現にも近付いていくはずで

患者との情報共有は、決して治療と無関係な単なるサービスではありません。医療安全を向上させると共に、患者を中心としたチーム医療を実現するために欠かせないものであるということに気付いてほしいと思います。